腐り切った組織の実態を継続してウォッチする　第六十九弾

# 神社本庁再生への道―その三十二

## 神社本庁田中―打田体制とは何だったのか

### ―体制刷新のため、万機にわたり公論を呼び起こすべし

藤原　登（フリーライター）

社会は大きく変わろうとしている、その兆しもある、という言説をよく聞く。

三年にわたる新型コロナ感染症の蔓延による混乱は、政府及び関係機関による対応が最大の原因であるとの疑念は残るものの、明らかに都市化が限界に達している現代社会が、変わらねばならない方向性の一つとその必然性とを、人々に認識せしめたことは間違いない。そして長期化するウクライナ戦争は、日本を取り巻く国際情勢にも暗い影を落とし続けているが、これまでアメリカが一人勝ちを続けてきた軍事や経済分野の覇権が、すでに多極化の様相を呈していることも事実だ。内外ともに不安定要素に満ち溢れており、これらは、世界が何らかの変化の途上にあることを示している。

**部分と全体は、相互関係にある**

問題の本質は、漠然と感じる時代の変化と自分自身との関係にあると思う。変化を感じる自身が、それに関与できるのか否か、ということである。筆者は次のようにこの状況を見ているからだ。

時代の変革期には、必ず予兆が現れる。それは、変革への期待がある故に、偶然の出来事をその予兆と受け止めているためなのかも知れない。しかし、前例通りとするか、それとも方向を転換するか、一つ一つは小さな問題だとしても、転換を選択する側の人々が増加し、そうした選択が一定の割合を超えて積み重なれば、間違いなく大変革への下地が固められてゆくことになる、ということだ。その意味で今の日本は、大変革への途上にあるのだと思う。

しかし、変革の初期段階なので、誰も変化の方向は見通せないし、一歩間違えれば、国民全体にとって悪い方向へと進む恐れもある。現代を生きる我々のつとめは、一人一人が知性を高め感性を研ぎ澄まして、変革の時代に生きているという自覚を養うことだと思う。

言い換えれば、世界のあらゆる事象が、人間の活動を媒介として影響を及ぼしあっている現代において、我々の日常の一挙手一投足も、それと無縁ではないことの自覚をもつことである。部分と全体は繋がっているのだ。

**田中―打田体制を産み出した土壌**

神社神道の世界も、間違いなく変革の途上にあるが、初期段階はすでに通り越して、大変革の前夜にいると思う。一番の心配は、その準備が関係者に出来ているか否か、ということである。その準備と覚悟がなければ、変革が中途半端に終わり、改悪に進む恐れもあるからだ。

改革の表舞台は、もちろん神社本庁である。民間団体である神社本庁は、現在は宗教法人法のもとに運営され、基本的に公的機関による強い規制などは受けずに自主運営されている。

世俗的には宗教法人と位置づけられる神社本庁であるが、その聖なる使命は言うまでもなく、全国神社の興隆と発展を図ることにある。そして設立当初は、GHQと交渉を重ねて神道指令からの神社の防護につとめ、日本が独立した後も、占領の後遺症が日本全体に蔓延する困難な状況の中、その使命を必死になって果たしてきたと思う。

しかし現在は、見るも無惨な状況となっている。田中―打田体制という双頭体制のもと、組織が私物化されてきたからだ。

神社本庁は、戦前は国家が担っていた神職の人事や栄典に代わり、独自の代替制度を構築してきた。主要な神社の宮司人事には神社本庁が直接関与してその適正を図り、同時に神職の表彰や身分に関する制度を整えてきたのである。何れも、神社の興隆と発展のために、公正な神職の制度とするためであったと思う。

しかし、田中―打田体制は、神社本庁の実権を握るや、その制度を悪用し、権力がさらに自分達に集中するよう、人事権や栄典付与権を私物化した上でフル活用してきたと言える。許せない所業だが、今後の神社本庁の改革に当たっては、それを許してきた神社界の体質をも問わなければならないと思う。

神社本庁設立から七十年余が経過し、年功序列が基本であった神職の世界も世代交代が進んできた。もはや、戦前の神道界の姿を直接知る関係者はいない。また、経済の高度成長によって、神社を取り巻く環境も大きく変化した。都会の神社では境内地を有料駐車場などにすることで不動産収入を得て経済的には豊かになる一方、人口の流出で過疎化が進んだ地方の神社は、疲弊する一方であった。もちろん、神社本庁も様々な手立てを考えたであろうが、結果として神職間の様々な格差は埋まることなく、神職の神社本庁に対する期待は薄れ、意識も離れてしまったのではないだろうか。そして一部の、謂わば「エリート神職」によって運営されるようになった神社本庁に、田中、打田の両氏がつけ入ったのである。

**理想を変革の起爆剤に**

神職のみならず氏子や崇敬者など神道人、神社関係者としての自覚がある方々には、この現状を深刻に考えてほしいと思う。大半の神社が神社本庁の包括下にある以上、神社本庁の問題を真剣に考えて欲しいと願うものである。

田中―打田体制は、遠からず崩壊する。彼方此方で次々と新たな事件が発覚している現状をみれば、誰でもそう思うだろう。問題は、新しい体制のもとで、どのように神社本庁を改革してゆくのか、それは全国神社の興隆、発展につながっていくものなのかどうか、ということである。そのためにも、新体制においては、田中―打田体制下で起きた様々な事件の真相解明と共に、神社本庁の歴史を再検証した上で、将来の改革へ向けたビジョンを示して欲しいと思う。それは、理想でも構わない。

当然、そこには様々な批判がおこるだろう。大切なことは、大変革の嵐の中で使命を果たしてきた神社本庁設立の原点に立ち返ることである。その上で、部分と全体が一体となった神社界の社会における位置づけを明かにし、批判も正面から受けながら、万機にわたり公論を呼び起こし、将来へのビジョンを具体化していってほしい。壮大な事業であるが、逃げてはならない。

藤原　登（ふじわら　のぼる）
昭和二八年、東京に生まれる。
昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。